

るのか、「そこ」に関わり葉山氏は何を感じ、何を考えたのか、そしてそれは私たちの「ここ」とどう切り結びうるのかについて語り合いたいと思います。」

そして葉山氏のお話を中心にしながら、それを引き受けながら、さらに二名の方にお話しいただいた。

一人は、本会会員の山田栄克氏。氏は、宮城県東松島市野蒜のご出身で、今回の震災でご実家が被災され、また幼い頃から可愛がってもらったという御祖母様を亡くされた。震災の時、そしてこの一年をどう過ごし何を思ったかを語ってくださった。山田氏は、仙台に避難されたご両親のもとに通い、改めて野蒜の年中行事などの聞き書きを始められたという。

もう一人は、本会会員で例会委員でもある三浦佑之氏にお話しいただいた。三浦氏は、遠野市の遠野物語百周年に関連する事業に関わるなかで、震災が起き、「遠野」を通して震災に向き合うことになられた。

三人とも、それぞれの場所で、それぞれの「三・一一以後」を経験されてきている。案内文に記したように、まずその三人のお話を聴くことを通して、「三・一一以後」という状況に、私たちが改めて「我が事」として向き合うための一つのきっかけを掴みたいと考えたのである。それらの記録を、「一年後」という時が刻まれたことばとして、「二年後」をむかえたここに掲載する。
(しげのぶ・ゆきひこ／例会委員)

例会記録／「第六二回研究例会 三・一一 一年後から」

被災地で考えたこと

葉山 茂

「被災地で考えたこと」というお題をいただきましたので、これまで私が国立歴史民俗博物館のスタッフとして関わってきた、宮城県の気仙沼市での活動を紹介しながら、被災地で考えたこと、についてお話ししたいと思います。

生態人類学における「経験」

まず始めに、自己紹介をさせていただきます。私は民俗学と生態人類学を専門としてきました。大学で生態人類学を学んで、大学院の後期課程から民俗学の世界に足を踏み入れました。民俗学についてはみなさんのほうがよくご存知と思いますけれども、みなさんにあまりなじみのないと思われる生態人類学について、少しお話しをさせていただきます。生態人類学は人びとの生活を研究の対象とするという意味では民俗学と変わりはないのですが、とくに参与観察にもとづいて人びとの活動を記述することを学問のアイデンティティにしてきました。経験で

きることはできるだけ経験する、現地の人といっしょの時間を過ごす、寝食をともにできるならするというようにフィールドで「経験」することを重視して人びとの暮らしぶりや生き方、そこにみられる人びとの生活の論理を描き出そうとしてきました。「経験」というものはなかなか抜いづらいいものではあります。数えられるものを数え、計れるものを数値に置き換えるなどの手段をつかって、なるべく客観性を保ちながら議論をしてきたのが、生態人類学です。数値に置き換えることは「経験」を語るための手段ですから、必要十分条件ではないことは言うまでもありません。

私は現在、民俗学の立場から生業研究をしています。しかし生態人類学的な態度から研究をやめてしまったわけではなく、民俗学の領域に生態人類学的な視点や態度を持ち込んで活動しています。私がおもに研究の対象としているのは、海と関わって生きる人びとの生き方や生産のありかた、人びとの生活の変遷です。

あとでくわしくお話しますが、この「経験」をどう考えるかが、今回話題とした東日本大震災で被災した方々や生活文化を救うということを考えてときに、重要なことであつたと考えています。

国立歴史民俗博物館の気仙沼レスキュー活動で

私は現在、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）で機関研究員

という立場で、目下、歴博が進めている第四展示室、民俗展示を新構築する事に携わっています。それに加えて、これも民俗展示に関わることですが、東日本大震災で被害を受けた気仙沼市小々汐の尾形家住宅で生活用具や民具を救って保管する仕事をしています。文化庁と東京文化財研究所が中心になって進めてきた、東日本大震災により被災した文化財を救う、いわゆる「文化財レスキュー」という事業の一環でもあります。今回は、この尾形家をめぐる活動のなかで考え方をくわしくお話ししたいと思います。

気仙沼市は東北地方の太平洋岸に長く延びる三陸リアス式海岸の一部にあります。宮城県の北端に位置し、北側は岩手県陸前高田市と境界を接しています。この気仙沼市は水産業がさかんで、人口は震災前のデータで七万三〇〇〇人です。二〇一一年十一月に気仙沼市が発表したデータによると、今回の東日本大震災による津波で一〇二八人がなくなれば、今なお三六七人が行方不明のままになっています。

私に関わってきた尾形家住宅は気仙沼漁港と気仙沼湾を挟んで対岸の小々汐という集落にありました。小々汐は五六戸からなる集落です。

日常性の再構築と「物語の救出」

さて、今日の結論を先にいってしまいますと、私にとって津

波の被災地で流された生活用具や民具を救う活動は、学問や生活のなかで自分が日々やっていること、やってきたことを改めて振り返り、その意味を問い直す機会になったということでは。

つまり被災地での経験は、過去には自分が新鮮なこととして受け止め、消化し、現在ではすっかり当たり前のことになってしまっている学問的な「常識」や生活経験のなかの「常識」を改めて問い直し、「日常性の再構築」をする機会になったのです。生活用具や民具を拾い集める作業は、一見すると単純作業に思えるかもしれませんが、あとから詳しく説明しますが、「なぜそれをするのか」をことあるごとに自問せざるを得ない活動だったのです。そして「なぜそれをするのか」を問うことは、民俗学という学問がなぜ、必要なかを考えることもあったし、自分が学問をしながらこの先どのように生きていこうとするのかという自分の生活自体を考えることもあったのです。

もう一つ、今日、お話をしたいことは、被災地における生活用具や民具の救出は、表面上ではいわゆる「有形民俗文化」の救出活動だったわけですが、それは単にモノを救出することではなく、モノにまつわる様々な物語を救出する作業であったということでは。モノというのは単なる物質ではなく、モノには地域社会で生きる人びとの記憶や生活イメージが染みこんでいるのであり、現時点でモノを救うことは人びとの物語を救うことになり得たということでは。

歴博と気仙沼・小々汐との関わり

ここで、気仙沼と歴博の関わりについて触れておきたいと思っています。小々汐の尾形家と歴博との関わりは二〇〇八年までさかのぼります。

現在、歴博は二〇一三年三月のオープンをめざして民俗展示の新構築を進めています。そのなかに「くらしと技」というコーナーがあり、尾形家の一部を再現して展示することを計画していました。そこで二〇〇八年から尾形家での調査を進めていました。このときには私は関係がありませんでした。この時の調査は、家の行事とか、歴史に関する聞き取り調査をすることが中心になっていました。そしていよいよ、これから展示にむけて建物の計測を含む詳細な調査をしようと準備をしていたところ、三月十一日の津波の被害に遭ってしまったのです。

地域の文化の結節点としての尾形家

尾形家住宅の歴史は一八一〇年までさかのぼることができました。この家には「立前御手伝控帳」という文書が伝えられてきました。その文書は文化七（一八一〇）年に家を建てる際に誰がどのように手伝ったかが記録されています。その文書からこの住宅が一八一〇年に建てられたことを確認できます。つま

り津波で流されたとき、尾形家住宅は建てられて二〇〇年目を迎えていたわけです。

尾形家は地域の同属集団、尾形一族の総本家であり、大家（オオイ）と呼ばれていました。そして、地域の政治的、経済的な中心でもありました。江戸時代には、イワシ漁の網元でした。今日、気仙沼はカツオ漁の基地として有名です。近世に気仙沼はカツオ漁の基地として発展するのですが、気仙沼がカツオ漁の基地になり得たのはエサになるイワシが大量に供給できたからだといわれています。そして尾形家は今日に続く気仙沼の主要な産業を支えた家の一つだったのです。ただエサとしてイワシを供給するだけでは生活は成り立ちませんでしたので、尾形家ではイワシのメ粕をつくって、それを売ることで収入を得ていたと思われます。

明治時代以降、この地域には鹿折村しおという行政単位がありました。尾形家の先祖はその村の村長を務めていました。尾形家は同族集団で構成される地域社会の中核にあった家であり、また政治や経済において重要な位置を占めてきた家でした。同時に、経済活動や政治活動、同族集団の本家という役割を背景として、さまざまな行事や信仰が息づいている家でもありました。尾形家は正月やお盆をはじめとして、さまざまな年中行事があるイエでした。正月には門松を三度作り替え、お盆には盆棚をつくって先祖を迎えていました。またオシラサマを祀ったり、金神様に対する信仰があったりというように、生活の折に触れ

てさまざまな神仏を信仰し、民俗行事を執り行ってきました。尾形家の方々の活動は民俗学の立場からみて魅力があり、注目すべき点が多かったのです。そうしたことから、歴博は尾形家を調査の対象として選びました。

建物自体も魅力がありました。被災前の尾形家住宅は大きな茅葺き屋根を持っていました。ご当主の尾形健さんが決意されて、二〇〇九年に茅葺き屋根を完全に葺き替えたばかりでした。大きな土間を持ち、土間の上がり框の角にはワラ打石が埋め込まれていました。そのワラ打石は生業活動のなかでつかわれるものであり、イエの儀礼のなかでつかうものでもありません。住宅は建築学の側からも注目されていました。

小々汐集落と尾形家の被災

三月十一日、三陸地方を中心として大津波が起こりました。まずは尾形さんご家族がご無事なのかを第四展示室の新構築に関わるメンバーで心配しました。そして津波の大きさから、おそらく尾形家住宅も何らかの被害を受けたであろうということは想像できました。気仙沼湾の至るところで火事が起きていたことは報道を通して知っていましたので、家事に遭ったのではな

いかと関係者全員で気を揉んでいました。しかし、尾形さんご家族がどうしていらっしやるのか、また尾形家住宅がどういう被害を受けたのか、ほとんど情報があり

ませんでした。歴博では民俗展示の新構築に携わるメンバーをはじめとして、どうなったのだろうかとお大変、心配をしました。

三月の後半になって、尾形さんのご家族が皆、ご無事だったことがわかりました。そのあと、被災地の衛星写真がインターネット上で公開されましたので、皆で小々汐を探しました。尾形家の屋根はもともとあった場所から離れた場所に写っていました。衛星写真は真上からのみの映像で、屋根の形があまりにきれいに写っていたので、住宅は単に平行移動しただけではないかとも考えました。

四月四日、歴博の民俗研究系から先遣隊が出かけていきました。結果として、ほぼ集落全体が津波で流れてしまい、無事に残ったのは数軒だったことがわかりました。そして尾形家住宅は、津波で一〇〇メートル、直線距離でいうと五〇メートルほど流され、住宅の屋根から上だけが残ったことがわかりました。建物の居住空間はすべて失われていました。

小々汐の集落は小高い山と山に挟まれた谷のような地形になっています。後日、尾形さんの奥さんに津波が来たときの状況を尋ねたところ、気仙沼湾の外側からやってきた黒い壁のような津波が小々汐の谷に押し寄せてきて、谷を一周して出て行ったことがわかりました。小々汐の谷では、谷の奥にあった二軒の家だけが辛うじて形を残していました。その後この二軒のうち、一軒はその場所に住み続けることになりましたが、もう一軒は取り壊しました。つまり、この谷には一軒の家しか残らなかった訳です。

震災のとき、私は

ところで、私は震災の時には、愛媛県の松山市に出張中でした。ですから東北や関東で何があったのか、リアルタイムでは全く知りませんでした。大きな地震があったことは、出張先から空港に向かうバスの中で知りました。テレビモニターに写される様子を、全く実感のないまま、大変なことが起きたと、なにか突き放したような、現実的ではない、どこか遠くの違う世界の出来事のように見ていました。

後になって、こういう感覚は前にもあったと思い出しました。二〇〇一年の「九・一一」です。あの時、アメリカでは同時多発テロが起こり、大きなビルが壊され、多くの人が被害に遭いました。あの時も私はテレビモニターに映された映像を眺めながら、「この先、この世の中はどうなってしまうんだろう」と不安がっていました。テレビモニターに映された東日本大震災と津波の様子も、その時とよく似た感覚で、どこかずっと遠くで大変なことが起きたと眺めていたのです。震災から数日後、すぐに「頑張ろう、日本」とか「頑張ろう、東北」というキャッチフレーズが出てきました。ところが震災に対して全く実感が無い私は、どうしても自分のことではないように思えるので、距離感を感じていました。遠くで起きていることに対して、俺達仲間だから一緒に頑張ろうと言われても、どこか同意できない

いし、ピンとこない、と思つていたのです。

ただ、漁業に興味をもつて研究をしてきましたので、漁業がさかんな三陸地方には関心がありました。テレビモニターに映される港の様子を見てみると、そのときはこれでこの先十年くらい三陸には行けないのかな、という根拠のない喪失感がありました。このときは、三陸に足繁く通うことになるとは全く思つていませんでした。これが三月の段階のことです。

私は、生業研究における自分の研究テーマの一つとして、人は困難に遭遇したときにどのようにそれを切り拓いていくのか、ということにずっと関心をもってきました。困難というのは、決して災害だけではありません。たとえば漁業をする人びとが、それまで生活の糧としてとり続けてきた魚がとれなくなつたということも、日常のなかで起こりうる困難だといえます。人びとの生業を対象として研究してみると、人びとの生業はかなり早いペースで変わっていくことがわかります。多くの人たちがその時々状況に応じて工夫していく営みを、私はとても興味深く感じていました。

そういう関心からすると、大きな被害を受けた漁業者たちは、どのようにこの困難を切り抜けていくのかということに気がなくなってきました。それが四月半ばのことです。そしてどうにかして三陸に行き、それを見ておきたいと思うようになり、すぐにも三陸に行きたいと思うようになりました。もちろん冷静になると、それは当時の状況では無理だということにも思い至

りました。第一、人々が困難な状況にあることを何もせずに見ているということは道義的にみてもあり得ないと思ひました。災害を乗り越えていく人びとの営みを何か記録しておく必要はあるのではないかと思う気持ちが半分、今そんなことをするのは失礼だと思う気持ちが半分、気持ちが行きつ戻りつしていました。

そんなときに、歴博の小池淳一先生に「今度、気仙沼に行くんだけど、行かないか」と声をかけていただきました。尾形家は先ほど話したように三陸の生活文化の一端を色濃く残した家でしたので、小池先生は流された尾形家住宅で民俗学の立場から何か力になれることはないかを探ることが目的だったようです。それで気仙沼に行くことになりました。

その時は、研究者としての視点で気仙沼を見たい、今、自分がこの変化を見ないと、きつと後で後悔するだろうと、とてもドライな目で、現場を見に行きたいと考えていました。結果的に漁業が復旧していく様子を逐一、記録に残すことはできなかったのですが、私が毎週、気仙沼に通う役割を担うことになり、気仙沼の町が大きな被害からどのように復旧していったのかを目の当たりにすることになりました。

被災地と私 対等な関わりへ

四月二日から二四日にかけて歴博のメンバー三人で二回目の

現地調査をしました。そこに私も加わり、津波で流された尾形家を、初めて目にしました。最初は、自分も食料を援助したりするように、何かの助けになるのではないか、と思つて行きました。ところが気仙沼の町に入つてすぐ、気仙沼の人たちは何も出来ずに困つて助けを請うている人々ではなかったことに気づきました。明らかに私の認識は間違つていました。現地に立つてみてすぐに、人びとは既に新しい営みを始めていることに気づきました。

行く前には、被災地の人たちとどう関わればいいのかを真剣に悩んでいました。しかし現地に行つてみてすぐに、「何かをしてあげる」存在としての私と「何かしてもらおう」存在としての「被災者」という関係性は成り立たない、ということを理解しました。私と現地の方々との関係は、「あげる」「される」の関係ではなく、自分がふだんどこかに行つて調査をするときと全く同じで、相手と自分は対等の立場、もしくはこちらが教えてもらう立場にいますのであり、その点はふだんの調査のときと変わらないと思ひました。少なくともどんな場合にできる人間関係も対等な人間同士のつきあいなのだと強く自分に念押しをしなければ、生活用具や民具を救出する作業は続けられないだろうと、このときに理解しました。

尾形家の民具・生活用具の救出へ

つぎに、実際に何をしたらかをお話します。基本的には、被災

した尾形家から生活用具や民具を拾いあつめて、救う活動をしたわけです。先ほどお話しした四月二二日から二四日の現地視察を経て、尾形家のものを救出する活動の中心となり、現地で調整する役割を私が担うことが決まりました。震災前の私は、どちらかと言えば現代的な問題につよい興味を持ち、生業活動を中心的なテーマにして調査や研究をしていました。祭祀や信仰にはあまり関心が無く、民具のような古いモノにはそれほどこだわらない、というのが私の研究スタイルでした。

しかし、現地で、なぜ生活用具の救出活動をしなければならないか、ということ論理づけなければならない、という状況になりましたので、考えをまとめ始めました。

ひとつは、救出したものを通して、救出した生活と歴史を後世に残すということが大事ではないか、そしてその方法として、一つはモノとして残す、それはできるだけ民具を回収するというところで実践する、そして歴史に、できるだけ精緻な再現展示を具体化するということで、形として残していけるのではないかと歴史博のスタッフで考えました。この時点では、そうすることで、地域社会の生活や文化の復興に寄与することができるのではないかと考えていたのです。

集めたモノが生活の再建の材料になっていけば、ということを皆で話し合いました。

文化財というカテゴリーと生活用具

この小々汐の尾形家に関わるモノで、文化財に指定されたり、登録されたりしたモノはありませんでした。尾形家にあったモノはすべて普通の生活用具であり、民具であったわけですが、私たちは作業を通して、自分たちのレスキュー作業がいわゆる文化財を救う活動ではなく、登録や指定のない一般民家の生活用具や民具を救う活動であるという特徴を自覚していくことになりました。

文化庁が呼びかけて、東京文化財研究所が中心となって「東北方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」という組織が立ち上がり、文化財レスキューと呼ばれる活動しています。この活動の趣旨は、指定も未指定も含めて、震災によって被災し、今まさに失われようとしている、あらゆる文化財を救うことです。しかし実際には被害があまりに広範囲で、しかも甚大だったことや個人の所有物を救う場合の所有権や管理権の問題があったことから、博物館や資料館などに収蔵していた文化財や個人蔵でも指定の文化財を優先して救出・保全活動が進みました。

こうした背景から、文化財としての指定や登録のないモノが救出されにくい状況が生じていました。こうした未指定・未登録でありながら、地域の生活文化を語る上で欠かせない生活文

化の救出を担ったのが私たち歴博の活動の特徴だったと言えます。こうした活動は国立歴史民俗博物館だけが行ったわけではなく、各地域の歴史資料ネットワークが被災地で行った地道な文書・生活用具の救出活動がありました。

しかしながら被災した地域が広範囲に及んでいたこともあり、どうしても民家の生活の痕跡、「文化財」としての価値が定まらないモノの救出は文化財レスキューの枠組みのなかでも優先順位が低くなりがちでした。震災が起こった当初からそのことは予想されていましたので、私たち歴博のメンバーは、意識的に「文化財」として価値の定まらないモノにアプローチするための論理付けをして、準備をしていくことになりました。

ところで被災した生活用具や民具を救出すると言っても、具体的にとどのような作業をするのかについて道筋を決めておかなければなりません。モノの救出活動というのは、ただモノを持つてきてどこかに置けばいいというわけではありません。まず救出があつて、その次にクリーニング、そしてリストを作成していかなければなりません。

尾形家の生活用具や民具は小々汐の谷を一周していった津波に流されていました。そうした状況から、尾形家のモノはおおよそ二万平方メートル（百メートル×二百メートル）ほどの谷一帯に散らばっていました。だからどこか一箇所を集中的に探せばいいというわけではありませんでした。しかも場所によっては、ほかの家のモノと混じり合っていることもありました。そ

こで「これは尾形さんのモノですか」と逐一尋ねて、確認をしてもらうようにしました。そうした形で作業をしたので、かなり長い時間をかけて尾形さんの奥さまや息子さんにご協力をいただいくことになりました。

まずは、谷のどこにあるかということ把握する必要がありますがありました。どこにどういうモノがあるかを尾形さんに確認してもらって特定していきました。しかし、救おうというモノが見つかったとしても建築部材と漁具と生活用具が複雑にからまって出てくるので、救出するのは簡単ではありませんでした。それに加え環境も非常に悪く、四月から七月にかけては重油と魚の腐敗臭が混じったような悪臭がしていました。五月に入るとハエが大量に発生しました。七月から九月にかけては、そのハエを食べて太ったジロウグモが大量に発生しました。津波の直後から破傷風などの感染症の可能性も指摘されており、衛生的にはよくない状況にありました。そういうなかで、何を探すのかを尾形さんと話し合い、希望を聞きながら作業をすすめていきました。

モノを探す作業は、最初、壊れずに残った屋根のなかからはじめました。まずは屋根のなかを集中的に探しました。五月十一日に屋根が「尾形家住宅修復保存プロジェクト」のメンバーの尽力によって解体撤去されました。私たちはそのあとしばらく、屋根のあった場所を探しつづけました。ただ、探さねばならないところは広大だと感じていたので、次第に谷全体に探す場所を広げていく試みもしていきました。いわばあっちも、こっ

ちも探すという状態になったのです。すると、時間が足りないということがわかってきました。行政による瓦礫撤去がいつ行われるのかは当時分かっていませんでしたが、あっちもこっちも手をつけていくと、すべてが中途半端な探し方で終わってしまいう可能性が高いように感じました。そこで今度は一箇所集中で、尾形さんに立ち会ってもらいながら、これはどういうモノかといったことを聞きながら作業をすすめるようにしました。一箇所を集中して探す決断をしたのが、七月のはじめです。七月の後半には屋根の下にあったものを一応、くまなく探し終えました。そのあと、藁打ち石や母屋の跡の搜索をしました。

尾形家住宅からモノを救出する作業をする上で、私たち国立歴史民俗博物館のメンバーが被災前に調査をしていたことやリクス・アークの副館長をしておられた川島秀一先生（現・神奈川大学特任教授）が何度も尾形家の調査をされていたことは、とても有利に働きました。ハッキリ知っていたわけではないかもしれませんが、イエにとつて大事なモノをご家族がどこにどのように置いていたのかを、情報として共有することができました。

それに加えご家族に現場に立ち会っていただき、どこにどういうモノを置いていたかを再確認することができました。その過程は、私たちが震災前のモノの状況を知ることであると同時に、尾形さんのご家族が、どういうモノを見つけてほしいと考えているかを知る過程でもありました。私たちが最終的にモノをたくさん見つけていくことができたのは、その情報をチーム

で共有できたからでした。

クリーニングと整理

現在も、何点モノを見つけたのかということが、よくはわかっていません。現在、リスト作りを進め、四五〇〇点まで数えることができましたが、まだまだモノがあります。モノを救出した後は、クリーニングとリストづくりをしなければなりません。

クリーニングの作業はともかく泥を落とす作業を繰り返しました。リストづくりでは最初、完璧なリストを作ろうとして破綻しました。結局、まずおおまかな把握をして、そのあとからリストを作っていくほうがいいことを、作業を通じて試行錯誤を繰り返して理解してきました。こうした大変な作業を中心に進めてくださったのは気仙沼市教育委員会の方々です。このリストづくりは、今も続いています。

問い質されるレスキュー活動

作業の過程で、地元の方々や被災地の取材にやってきたマスメディアの人びとに、私たちの作業の意味を問われるような場面が何度かありました。

お盆のお墓まいりの日、アメリカのある雑誌社の記者たちが尾形家を訪れました。彼らは瓦礫の撤去が全く進んでいない現

状を見て、大いに尾形さんに同情しました。そして私たちに聞こえるように、尾形さんに「文化財レスキューをしているせいで、この地域の復興は遅れているのでしょうか？」と問いました。すると尾形さんは「そういうことではないんだけどね」と答えました。しかし記者は私たちに遠慮しているのだと感じて「文化財レスキューをしているせいで、この地域の復興は遅れているんだよね」と念を押すように問うたわけです。

実際のところ、私たちが被災した尾形家住宅の生活用具や民具を救う活動に入っていることを気仙沼市の行政担当の方々把握しており、さまざまな形で配慮をして瓦礫撤去の計画を調整してくださいました。その意味では小々汐地域の住民の皆様にもご迷惑をおかけすることになりました。私たちの活動が瓦礫撤去の遅れに全く無関係であったとは思いません。ただ被害が甚大で倒壊した家、流された家も多かったこともあり、瓦礫撤去の作業自体も時間がかかっていたことも事実です。八月当時、撤去作業の範囲は次第に小々汐に近づいてはいましたが、まだ小々汐まで至っていませんでした。

復旧に向けて瓦礫撤去を急ぎ、新しい生活ができる状況になって欲しいというのはマスメディアの側からみた正義だっただと思えます。そして何よりも私たちも瓦礫撤去が早く終わるに越したことはないと思います。したがってできることしかできないし、瓦礫撤去が始まったらそこで私たちの作業を打ち切る覚悟はしていました。

こうした状況のなかで記者が尾形さんにした質問は、私たちの活動を問い質すものとなりました。私たちは、なぜ生活用具や民具を救っているのかを丁寧に説明する必要があると強く感じました。それは、当然のことではありますが、民俗学という学問がアプリアリに被災地で文化を救うことに対して正当性をもつことはないということを再認識させる出来事でした。

被災した現場で学問を振りかざして、それが役にたつと言ってみたところで、ほとんど意味がないと思います。もしそこで何かをしたい、何か役に立ちたいと思えば、何をどのようにやりたいのか、そしてそれにはどういう意義があるのかをきちんと説明する義務が生じてきます。生活や文化について何かをしたいと思えば、逐一、なぜそれをやるのかを直接的な言葉で地域の方々やマスメディアの関係者から問われるし、同時に自身もそこにいる意味を考えようとすれば、同じことを自分自身にも問うていく必要があります。結局、被災の現場で民俗学的な活動をしようと思ったときには、日常では常識化して改めて問う必要のないこと一見当たり前のことにきちんと答えを出していく必要があることに気づきました。

「なぜそんなことをやっているのか？」と地域の人びとやマスメディアの人びとから問われることで、自分自身でも何でこういうことをしているのか、問い直さなければならぬということになっていきました。そこで結局、私は三つのことを考えることになりました。

三つの考えるべき課題

一つは、ふだん私たちが「文化財」と言い表しているものは、いったい何かということです。そして文化財ではない生活用具と民具をなぜ残さないといけないのかということです。さらには自分のやっていることは本当に間違っていないのだろうか、ということを考えざるをえなくなっていました。

二つ目は、民俗学は共感の学問だといわれますが、共感などできるのだろうか、ということも考えざるをえなくなっていました。

三つ目は、民俗学を志すときに、生活とか文化を研究対象としてきましたが、なぜ生活や文化を研究するのか、そのこと自体は自明なのだろうか、ということも考えざるをえなくなっていました。

「文化」を救うことは自明か

文化財の価値を決めているものは何かという問いを立ててみます。普段であれば、古いことや稀少であることは、文化財の価値を決める上で重要な要素の一つになります。古いことや稀少であることを私たちは価値のあることと考えているわけです。

しかし被災現場で「文化財を救出しましょう」という活動を

いざやってみると、文化財としての重要性よりも、まだ生存している人びとの救助、そして亡くなった人びとの搜索が最優先されますし、さらに生活の場を復旧させることが優先されます。被災の現場というのは、そうした様々な優先すべき事柄が重層する場です。そのような現場では、文化財や生活用品、民具を救う事がなぜ必要なのか、直接的な問いとして活動する人びとに投げかけられます。

それでもすでに登録されたり、指定されたりした「文化財」であれば、国のお墨付きをもらって大切だということは共有されているので、多少、救出の必要性が共有される可能性は残っています。ところが指定のない生活用品や民具は、無秩序に積み上げられていけば、瓦礫の山と呼ばれ、ゴミとして認識されることも多いのが現実です。復旧を急ごうとすれば、被災前には秩序付けられていたモノが無秩序になってしまった瓦礫の山をゆっくりほぐして日常を取り戻す時間は少なく、地域の人びともゴミになってしまったと考えざるを得ない状況に立たされるのです。瓦礫を片付ける行政の担当者や作業にあたる人びとは、当然、瓦礫を片付けるべきゴミとして扱うこととなります。被災した生活用品や民具を拾う活動を続けるには、そうした状況のなかで、こういうモノが大切なのだと言わなければなりません。そこでいろいろと考えなければならなくなりました。NHKの文化部の記者が私のところに電話をかけてきて、私たちが取材が可能かどうかの下調べをしました。まず、はじめに彼が私

に尋ねたのは、「こんな大変なときに、なぜ文化財を救出することが必要なんですか」ということでした。この質問は私たちを試すための質問だったかもしれないし、その意図はなかなか分からないところがあります。しかし社会一般の認識を代弁して問うてきた彼の発言は、現実問題として「文化」は、復旧や復興に向けた動きのなかでは二の次のことであり、それはいつでも取り戻せるものと位置づけられていることに気づきました。するとアプリオリな価値がないところに価値を見いだすのは生活用品や民具を救い出す活動をしている自分自身であり、自分が説明しなければ、その価値は認められないということになりました。そこからモノを救い出すことの意味を考えることになっていきました。

文化を語るよすがとしてのモノ

人が生きていけば、モノが無くなっても、人の想いや記憶をたどることができるといふ考え方があります。たしかに想いや記憶は、人が生きていけば、その人に昔をたどって引き出すことができます。しかしモノの存在は、その想いや記憶に具体性を与えるのだらうと思います。もしモノが無くなってしまうえば、生活の記憶を具体的にしたり、記憶を引き出すきっかけを失ってしまったりする可能性があります。

これが次の話しになります。つまりモノには物語がある、と

ということです。生活用具とか民具とは一見すると、ただのモノ、物質と認識されてしまいがちです。生活用具や民具は、民俗学では有形文化財と呼ばれ、芸能や年中行事などの無形文化財とわけて語られます。しかしモノは考えてみれば当然のことですが、ただの物質ではありません。

私も、最初にお話ししましたように、生活用具とか民具には全く興味がありませんでした。たとえ人びとの技術がモノに凝集されていたとしても、それは拾い出すまでもなく、人びとの具体的な活動をみれば理解できるのではないかと考えていました。ところが、この活動を続けていくなかで、そうではないことに気づきました。たとえば、スーパリーにならんでいるモノと、個人が具体的に生活のなかで使ってきたモノは、物質的にみれば同じモノかもしれませんが。しかし同じモノであっても、それを人びとがそれをどう使い、どう位置づけるかによって、モノの存在意義は異なってくるのだということに、遅まきながら気がついたのです。つまりある人が使ってきたモノには、その人が生活のなかで経験した事柄や知識、記憶などの具体的な生活イメージが蓄積されているのであり、それはその人にとっての物語であったということです。

するとモノを救う行為は、モノを瓦礫のなかから拾って生活の痕跡を残すことが最終目標になるわけではなく、そのモノに蓄積された具体的な物語、モノを通して見える人びとの生活世界をも引き出すことが目標になると考える必要があるということ

です。モノをめぐる物語はモノさえあれば、不特定多数の人びとの物語を引き出すことにまで広げていけるかもしれませんが、まずはそのモノを使って生きてきた「その人」の、身体にまで染みこんだ物語を引き出す必要があるのだらうと思います。

そうした「そのモノ」を使ってきた「その人」の物語を引き出してこそ、モノを救出する意味は深まっていくということに気づきました。逆にモノが失われてしまえば、言語として表現されずにモノとともに眠ったままになっていた物語は永遠に失われてしまう可能性もあります。瓦礫が撤去されてしまえば、モノを前にして、眠っていた物語を聞く機会が失われてしまうということにもなるのです。つまり瓦礫が瓦礫として処理され、片付けられてしまうことは、同時に多くの具体的な人びとの身体やモノに支えられて存在し、言葉にされていなかった物語を失っていくことになるわけです。もちろんそうした具体的な物語を引き出すにはそれ使ってきた人が元氣であることが重要な条件になることは言うまでもありません。

以上をまとめると、モノの救出は、単に民具を集めて標本のように収集しておく行為ではなく、身体化されている物語を引き出していく糸口を残す行為であるということになります。

ワラ打石を探す経緯

そうしたことを一番考えさせられたのが、尾形家のワラ打石

と呼ばれる石を探したときです。ワラ打石について簡単に説明しておきます。ワラ打石は尾形家の母屋の玄関を入った土間の上がり框のわきで、地中から少しだけ頭を覗かせて埋められていた石です。土間では非常に大きな存在感を持っていました。この石はワラ縄を作るなど、生活に必要な道具をつくるときに使うモノでした。ワラ打石の上にワラを置いて、木槌でたたいて柔らかくし、柔らかくなったワラで縄などを作っていました。ただ生活用品をつくるのに必要だっただけではなく、この石は年中行事のなかの儀礼でも使われていました。

たとえば一月十一日に行われる農始立のうはだてや十二月の暮れに行われるスス掃きなどの年中行事では、この石は重要な役割を果たしました。農始立はその年の農作業をはじめるとあたって執り行われる行事であり、またスス掃きはその年の仕事の終わりにあたって執り行われる行事でした。この二つの行事では、小々汐の親戚が尾形家に集まり、若い人がワラを打って柔らかくし、年配の人たちはワラをなめました。この行動を通して、人びとは年の始まりと年の終わりを象徴的に体験してきたのです。

母屋の屋根があった場所に折り重なるようにして散乱していた生活の痕跡をまさに人力ですべて動かす、片付け終わった七月の中旬、次に何を探すかという話になりました。この作業の責任者であり、二〇〇八年から尾形家に調査に入っていた小池淳一先生は被災直後からこのワラ打石の行方を気にしていました。そして尾形家の御当主の奥さんである尾形民子さんも、と

きおりワラ打石の話をしていました。そこで次はワラ打石を探したらどうだろうかということになりました。何しろ大量の瓦礫が広い範囲に散乱していましたので、目標をきちんと決めて作業をしていく必要がありました。その目標の一つにワラ打石がありました。

ワラ打石を探すことを決意して、はじめて瓦礫の積み重なった家の跡地に立ったとき、それがどこにあるのか分かりませんでした。そのときいた私たちのメンバ―のなかで、被災前のワラ打石をみたことのある人はだれもいませんでした。私たちは、漁網と鉄扉と生活用品が複雑に絡まった一メートルほどの山の前に立ち、途方もない大量の瓦礫を取り除く必要を感じていました。

そのとき、尾形さんの奥さんである民子さんがおおよその位置を教えてくださいました。民子さんはまず歩き出して、回りの景色を眺めました。そして正面に杉の木を見て、左に住宅の離れの基礎をみながら「こちら辺が玄関ですわね」と、玄関があった位置に立ちました。玄関から少し歩きながら、「なんだか、瓦礫が積み重なっちゃって、わからなくなっちゃわね」と言いながら、かつて土間であった場所の近くを行ったり来たりしました。そこで私と一緒に来ていた加藤秀雄さんに目立つ棒を持って立つてもらいながら、場所を特定していきました。

ワラ打石があった場所のまわりにあった瓦礫をある程度取り除くのに数日かかりました。そして、いよいよワラ打石を

探すことになったその日、ほかの歴博のメンバーといっしょに小々汐に着いた私は、改めてワラ打石について民子さんに質問しました。先ほどもお話ししたように、私は震災前の尾形家住宅を見たことがなく、言葉でワラ打石を知っていますが、それがどんなもので、どこにあるのが具体的にわかりませんでした。予め写真をみて、おおよその位置を想像していたのですが、それはまさにおおよそでしかなく、いくら近くの瓦礫を取り除いたとはいえ、瓦礫が積み重なって荒涼としてしまった小々汐の谷のなかで、その石を探すことは不可能に近いように感じました。そこで石を探すには改めて、よく知っている民子さんに聞く必要があると思いました。

話は私の「ワラ打石はどこにあったんですか」という一言で始まりました。「どう説明すればいいのかなあ」と言いながら、民子さんは木の棒きれを手にして、瓦礫を片付けたあとの平らな場所に家の見取り図を描き始めました。その説明の過程は非常に興味深いものでした。

まず民子さんは家の入り口を描きました。「ここが玄関でしょ」と説明を始めました。「ここに入り口があつて、みなさんはここから入つて」と戸の位置を描いていきます。つぎに「そしてこっちがオカミ」と言つて仏壇と神棚のある二つの座敷を描きました。するとそこに家の空間ができました。そして「ここに板の間があつて」と言いながら、土間の上がり框を描きました。そして「みなさんがここからおあがりになる」と付け加えました。

「そしてここが台所の炉」と言いながら、囲炉裏を描いていきます。尾形家住宅で台所といえば、元々、玄関を入った土間にある囲炉裏のある部屋を指しました。被災した当時はすでに新しく現代の台所を建て増していました。土間の囲炉裏は現在まで、台所と呼ばれていました。

さらにこれで土間の空間がハッキリとわかるようになりました。そして土間の上がり框を再びなぞり、「ここが板の間で」と言い、その板の間の角のところが棒きれで指して、「ちょうど、このところにワラ打石があつたと思うんです」と地面に印をつけました。そして「それから、この板の間の下は、何というか、礎石のような丸い石ではなくて、四角い石が並んでいたように思うんですけど」と四角い石が地面に並んでいる様子を描きました。

民子さんがこうやって場所を教えるいく様子は、まるで自ら先頭に立つて家の中を案内しているようにも見えました。いわば私たちが具体的なモノを探したいと言つたことで、家の中を手探りで歩き、その身体に刻み込まれた暮らしの記憶を思い起しながら、「ワラ打石」のある場所まで案内をしてくださったように思えました。

民子さんのその身振りと言語に接して、人は具体的なモノをイメージしたときに、身体化して言葉化していかなかった事柄を、他者に言語化して伝達することができるということを知りました。そういうことを重ねていくことが、生活イメージを

再現することにつながるのではないかと考えました。

現在はインターネットの時代、情報化の時代といわれます。そこでは情報は、具体的な身体や場所から切り離されても存在することができるといわれてきました。つまり情報が情報を生み、その情報が全く異なる実態と容易に結びつくことができるというわけです。

情報とは、別の言い方をすれば語りということができません。語りに関する議論の中では、語りは消費され、消費の過程で新たな語りが生み出され、というように絶え間なくなぞられながら、新しく生み出されるものとされています。こうした語りをめぐる議論では、語りが生み出される実態としての社会よりも、語りが流通するプロセスが重視されます。つまりどのような具体的な背景、どのような具体的な場所、どのような具体的な人を相手に語りが生じるのかというプロセスへの言及が弱いということです。

しかし尾形民子さんのやりとりを改めて振り返ってみると、その物語は具体的な場所があつて、その場所に存在する具体的な人びとがいて、その人びとがもつ具体的な身体があり、その身体をつかうことで蓄積する具体的な経験があり、その経験が言語に置き換えられていくのだということに気づきます。すると、私たちは日常の中で、具体的な経験とそれを支える場とモノを非常に軽視してきたのではないかと、ということを変更して考えさせられます。

だからこそ、その物語を生み出す具体的な場や身体に改めて

注目する必要があるといえます。同時に、こうした具体的なモノや場所、身体から生じる物語を引き出すとき、私たちがなぜフィールドに行かなければならないのか、ふだんの学問のなかで、なぜ参与観察のような一見すれば非効率的な調査法を、何かを理解し表現するためのプロセスとして、経験しなければならぬのかを改めて考えさせられます。

共感と参与観察

さて、被災した家の敷地の上で語られた尾形さんの語る物語を私たちが受け止めようとするのは、震災後という場のなかでいかなる「共感」がありうるのか、または「共感」など不可能なのか、という問題に関わってきます。

津波で流された集落に立つと、地域の人たちにとって津波被害とはどのようなものだったのかということを考えてしまいます。ところが、次の瞬間どうがんばっても理解できない自分がいることに気づかざるをえなくなります。私は今回、東北地方太平洋沖地震の本震を経験しませんでした。余震は何度か経験しましたが、本震があれば余震がつきものであることは知識として知っていますので、それほど驚くことも、恐怖を感じることもありませんでした。津波の原因となった最初の地震すら経験せず、津波もモニターを通して眺めていただけです。つまり地震に関して、当時を語れるものを何も持ち合わせていなかっ

たのです。

そうした状況にあったからなのか、現地に行っても津波に關わる一連の被害を悲しいと思う感情も生まれなし、津波は恐ろしいという感想も持ちませんでした。テレビは何度も悲しみの場面が映し出し、それに対していろいろな人びとが同情したり、一緒に嘆いたり、慰める姿を幾度となく見ていました。そして、一緒に気仙沼に行っていた人たちのなかでも、被災地をみることは辛いと言っていた人はいました。それなのに自分にはそうした感情が一つも起こってきませんでした。なんと自分は冷たい人間なんだろうかと何度も自分を責めもしました。現場に立ちながら、こういう何も感じない自分は、どうかしているのではないかとという反省を何度もしました。そしてそういう感情を持ってない自分は本当に文化を扱って何かを考える立場にいていいのだろうかという疑問もありました。こうしたことは気仙沼に通いながら、何度と無く考えたことですが、現在でもそういう自問自答を繰り返しています。

では、どのように目の前の他者とかかわり、その語りにむきあっていくのか。この問いに対する答えは、民俗学や生態人類学などのディプリンの問題に切り分けて、矮小化して考えることではないと思います。この問いに真摯に答えようとすれば、まずは自分がこれまでの人生や勉強のなかで身につけた使えるようなスキルや知識などを総動員して、総合的にかかわるようになります。私にとっては、どうにかして共感に近づきたいと考

えたとき、もつとも近づきうるツールは参与観察という調査方法をだと考えました。

自分でも半ば押しかけようだとも感じましたが、毎週、気仙沼の小々汐に通っていき、尾形さんや奥さん、息子さんと作業する時間を大切にしました。尾形さんや奥さん、息子さんと体を動かしながら、ときに話をしました。これはああゆうもので、こういうのもので、という話を聞きながら、作業を進めていったのです。

たとえば粉々に割れてしまった囲炉裏の上につるしておくヒゲダナという棚がありました。これを見つけたとき、尾形さんはこの上にドンコ（エゾアイナメ）を開いて囲炉裏の上で干しておく、おいしくなるという話をしてくださいました。また家の構造も、瓦礫を片付ける作業のなかで、この柱はどこにあったのか、この梁はどこのものであったのかということも自分でも想像し、尾形さんや奥さんの民子さん、息子さんに尋ねました。すると私は津波前の家を一度も見ることがありませんでしたが、その家があたかもそこに存在していて、自分がその家の中かにいるかのような感覚になることが何度もありました。こうした経験を踏まえてみると、そういう尾形さんのご家族との作業は、参与観察そのものだったということができるように思います。

そして、今日まで六ヶ月近くそういう作業をしてきたわけですが、人びとが経験した津波の体験を理解できたかというところ

そういう感覚にはなれない自分があります。自分が共感して、相手のことがわかったと思ったときには、自分はわかったと思いきんでいるだけなのではないかとも考えます。

対象を理解するという営みは、日常のフィールドワークのなかでも難しいことだと感じています。私は調査研究活動として漁村に行つて、調査対象の人びとを理解しようとするのがよくあるのですが、いろいろな調査をするときは一応理解したという感覚を得ることができません。ところがしばらくすると、それは思い込みだったのではないか、これが全てではないはずだと思ふようになります。こうした繰り返しの中で、ごく少しずつ対象とする人びとを理解していくのですが、自分以外の人びとに共感することはきわめて高いハードルなのだろうと思います。

以上をまとめますが、被災地に通うなかで、自分が携わつてきた生活用具・民具の救出活動は、一種の参与観察の現場であるという発見をしました。一方で、その経験がこれまで自分が行つてきた参与観察という作業のあり方を問い直さざるをえないことになっていったということです。

「文化の復興」は自明か…

人々の選択を長い時間のなかで見守ること

そして生活や文化を研究対象とすることは自明なことか、と

いう問題が改めてでてきます。先ほどもお話ししたように、被災地で優先されるのは、何よりも人命の救助やライフラインの復旧です。そういうなかでモノを救出する、生活文化を残すという活動をしていると、地域の人びとやマスメディアに何らかの説明をする必要が出てきます。

つまり、どうしても被災の現場でうろろしている、こんな大変な時に何をやっているのかという視線に晒されるので、じっくり用意をして、自分たちの存在意義を説明しなければならぬわけです。そういうとき、私たちは公式的な見解としては、復興には建物やインフラ整備などのハード面の復興と生活や文化などのソフト面の復興の両面があり、ハード面の復興がどれほど進んでもソフト面を充実しなければ結果的に本当の復興にはならないという答えを用意していました。

自分でも多くの人びとにそのように説明しながらも、どこかで公式の答えに納得していない自分がありました。現在でもどこか公式の答えに対する疑いを持ち続けています。たとえば、しばしば民俗芸能は地域コミュニティを再興する上で重要な役割を果たすという議論があります。そして津波によって今、まさに解体してしまおうとしているコミュニティで地域の文化の象徴である民俗芸能を復活させ、ひいては地域コミュニティの関係を再生させようとする試みがさかんに行われています。

こうした活動はたしかに被災した方々を元気にし、また地域コミュニティの復興、そして伝統の持続・存続に寄与している

ように見えます。地域に根ざし、人びとの感情に訴えるような活動を復活させていくことは、地域コミュニティの復興にとって効果的な手段であるといえるでしょう。

しかしこうした活動を否定するものではありませんが、果たして生活や文化の重要性を自明視して、文化の復興を手助けするという視点がア priori に正当性を持つかどうかは別のことだと思います。被災地に対する民俗学などの文化を扱う学問の関わり方は、果たしてこれだけで良かったのだろうかということを生、後になって気がかりになってきました。

それは当然、他人の活動だけにとどまる事ではありません。自分たちがやってきた、生活道具、民具の救出という作業も、本当にこういうやり方でよかったのか、ということが、だんだん心配になってきました。つまり自分も含めて、民俗学者など文化を扱うことを専門とする人びとの、地域社会への関わり方を考えるようになりました。

なぜ、そういうことを考えるようになったか。そのきっかけは、被災地の被害の悲惨さ、そして一向に進まない被災地の状況に関する報道の一方で、私が最初に行って自分の目でみた被災地での経験は、非常に解放的で、どこか明るく感じたことになりました。もちろん当時、被災地の方々にはいろいろな感情があり、深い悲しみもあったと思います。しかしそれと同時に、被災地には状況を好転させるべく復旧に向かっていく活気が満ちており、そこには過去の社会関係を一瞬、どこかに棚上げし

て新しく関係性を構築していくことに集中しようとする解放感や復旧をめざす活気からくる明るさなどがあったように思います。その解放感や明るさが、ひよっとしたら建物がなくなってしまう、光を遮るものがなくなってしまうことによる物理的なものだったのか、人びとの感情のなせるものだったのか、その点は定かではありませんが、一瞬ではあるでしょうが、たしかに過去のあらゆる束縛から解放されたような感覚はあったのだろうかと思います。

民俗学は、文化や生活を研究してきたのであり、こういうときこそ地域社会の伝統とか文化を伝えていくためにがんばらなければいけない、という立場は、当然成り立ちうると思います。そしてそういう立場は尊重されるべきものだと思います。その一方で、少し静観してみること、そしてゆっくり人びととつきあい、そのなかで人びとの細やかな論理を読み取り、そこに生じる様々な感情を理解することも重要なのではないかと思います。

津波が数十年に一回、周期的にやってくるようなところで、人びとが住み続けてきたということも、厳然たる事実です。津波が三十年、五十年に一回、やってくるようなところに人々が住み続けてきたということに対して、もう少し、なぜそういう選択をしてきたのか、そしてどういうふうにもその場所で生き続けてきたのか、ということに思いを馳せてみる必要があったのではないか、それを被災したからとか今できることと殊更、現在にだけ注目するのではなくて、人びとの生き方の問題として

長いスパンのなかで考えてみる必要があるのだろうと思います。

なんとかして地域から失われかけているものを助けてあげなければいけない、という使命感というのは、尊いものだと思います。しかし同時に、「助けてあげなければならぬ」と思ったときの「あげる」という思いには、上下関係が生じています。つまり「あげる」、「してもらう」という関係には強者と弱者という関係性が生じるわけです。それは、人類学などが日常の研究のなかで強く批判してきた、発展途上国の人たちは生活が遅れており、貧しいのだから援助してあげる必要がある、恵んであげる必要があるという発想と似ているかもしれません。少なくとも、現場に立ったとき、自分がそういう感覚を持つていないかという疑いを自分自身のなかを持つ必要があるのではないかと思います。

被災現場が民俗学に問いかけること

最後に、被災の現場が、民俗学に問いかけることを改めて考えます。被災の現場というのは、なぜ、生活や文化を残さなければならぬのか、ということを直接的に問いかけてくる場所であった、ということができます。ふりかえって、自分達の学問というものに目をむけてみると、直接問われてはいないけれども、なぜ生活を残すのか、文化を記録しようとするのか、なぜ、それを研究するのかということについて、日々の実践と

して、真摯に自分自身に問いかけて、同時に応えていかなければならないということを、被災地の現場は、改めて気づかせてくれたということができると思います。

こう考えてみると、救出活動そのものがフィールドワークのプロセスであったということができると思います。尾形家のモノを拾ってくることは、瓦礫という無秩序化してしまった生活の文脈から、拾い出し再構成していく営みだと言えます。瓦礫は一見すればゴミのように見えますが、それは無秩序になつてしまった生活の諸要素が集積しているものだといえます。そこからモノを引き出してくること自体が秩序化の過程としてとらえることができます。

そのプロセスは、じつは普段のフィールドワークにおける体験とよく似ています。たとえばある地域で人びとがどのように生きてきたのかを知ろうとしたとしましょう。まずフィールドに入ると、だいたい何かから手をつけたら良いのかわかりません。これならいけるだろうか、あれならいけるだろうかと中心テーマにできそうなことを探します。その時点では調査者にとって、フィールドは無秩序で理解不可能な状態です。そこから少しずつ手がかりをみつけ、その手がかりをもとに新しい知識を獲得していきます。すると、少しずつ対象を秩序付けて理解していくことができるようになり、フィールドのなかに秩序立った知識を発見することができます。こうしたフィールドワークの営みと瓦礫から生活用具や民具を救出してそこから地域の生活の

全体像を知ろうとする営みとは、よく似ているのです。

加えて言うと、被災地で無秩序化してしまった生活用具や民具を救う活動は、儀礼的なフィールドワークだったのではないかと考えています。ここで言う儀礼とは「うわべの」という意味ではありません。きちんと手順を踏まなければ進まないという意味で儀礼という言葉を使っています。大学に行くと、フィールドワークの基礎を習うことができます。たとえば、調査をする前にはインフォマントと綿密に連絡をとること、そして調査のときにはインフォマントとの信頼関係、ラポールをいかにして築くかということをフィールドワークに行く前にならいます。

被災地で生活用具や民具を拾い集めようとすると、持ち主と信頼関係を築くことが不可欠です。ただでさえ、被災地では盗難が横行しているというような情報が飛び交っています。そのなかでモノを救おうとすれば、私たちはモノを盗りにきたのではないということと態度として表明する必要があります。私たちはモノを救い出すとき、たとえ見つかって、現場に置いておくことがそのモノにとって良くないと思える場合でも、まずは尾形さんご家族に確認してもらってから、保管場所に運ぶようにしていました。資料保全の立場からすれば、正しくない行動かもしれませんが、しつこいようでも毎回、見つけたものを確認してもらい、それを持って行って保管してよいかをモノの持ち主に判断してもらうことが、信頼を得る上できわめて重要だったと思います。またいつ現場に行くのかも、明示してこま

めに連絡をとりました。こうしたことをいわば教科書通り、きわめて型どおりにすることを通じて、辛うじて信頼関係を作っていくことができたのだらうと思っています。

こういうふうになると、被災した場所で無秩序になってしまった生活用具や民具を救出する活動は、先に述べた意味で儀礼的なフィールドワークだったのではないかと考えます。

繰り返しになりますが、今日お話ししたことをまとめますと、一点目は、被災の現場で民具・生活用具を救出するという活動は、被災地で日常を再構築する現場であったということ、そして被災地の救出活動のなかで改めて自らの研究の姿勢そのものを問われたということです。二点目は、生活用具や民具の救出ということが単なるモノの救出ではなく、地域の生活イメージや物語の救出であったということ、そしてその救出したモノには多くの物語が染みついているのであり、そうした物語が育まれてきた場所に立ち、ゆつくりその歴史や人びとの生き方を知ろうとする視点が必要なのではないかということです。以上、気仙沼での私の活動のなかで考えたことを言い散らかす感じになりましたが、私の話を終わりたいと思います。ありがとうございます。

(はやま・しげる／国立歴史民俗博物館)